ISSN 0387—7280

国際日本文学研究集会会議録（第11回）

PROCEEDINGS OF THE 11th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN

(1987)

国 文 学 研 究 資 料 館
NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE

情 報 資 料 室

PROCEEDINGS OF THE 11th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN

1987

National Institute of Japanese Literature

1-16-10, Yutaka-cho, Shinagawa-ku,
Tokyo, 142

第11回

目　　次

あいさつ　小山弘志……3頁

研究発表

『万葉集』の称讃歌と『詩経』の頌詩との比較
——国家形成期における発想の探求を中心とする——
孫　久富……13頁

万葉集の「今夜」「明日」について　稲岡耕二……38頁

近世演劇における八百屋お七像　Valerie Durham……57頁

からくりと竹本義太夫
——人形浄瑠璃史の転換点——
諏訪春雄……74頁

シュルリアリズムの絵を先取りした朔太郎の詩
月村麗子……87頁

円地文学における「霊的なもの」　Eileen B. Mikals Adachi……103頁

をみなへし・あさがほ、そして紫式部のあさがほ
宋　貴英……115頁

『讃岐典侍日記』の表現　林　水福……144頁

六条家歌人の個性、特に藤原清輔の場合　Reuben M. Gerling……157頁

公開講演

日本文学におけるパロディ
——近世的受容方法としてのパロディ——
Roland Schneider……166頁

曲　舞　Patrick G. O'Neill……182頁

記録

日程および研究集会の経過……199頁

参加者名簿……200頁

国際日本文学研究集会委員会名簿……205頁

あ い さ つ

小 山 弘 志

第十一回の国際日本文学研究集会の開催にあたり、御挨拶を申し上げます。

昨年は第十回ということで三日間にわたって催しましたが、今回はまた例年に復しまして、二日間、今日の午後これからと、それから明日、午前は研究発表、午後は公開講演会、というようなスケジュールでいたします。お手元のプログラムでお分かりになりますように、今日の午後は研究発表が六つございます。明日三つ、合わせて九つでございます。ちょっとハードなスケジョールになりました。おかげさまで年を追いまして、発表のお申し込みも多くなってまいりました。今回も十七の応募がございまして、館外のかたにも加わっていただいております委員会で検討しまして、時間のゆるす最大限、九つの御発表を選ぶことになった次第でございます。

前回も申し上げましたが、こういう集会はどういう形が良いか試行錯誤を重ねているところでございますが、外国人のかたで日本で勉強なさっている人、また外国において日本文学研究をなさっているかた、日本人であっても長く外国において研究なさっているかた、そういうかたが自ずから多くはなるのですが、そういうかたばかりになるのもどうかということで、ある程度、現在日本で研究なさっている日本人のかたのも加えていきたい、というのが私どもの考えでございます。今回は九つのうちの二つがそういう、いわば日本人による日本文学の研究ということになっております。こういうことを区別するのはどうかとも思いますが、やはり外国にいらっしゃったりあるいは外国人のかたであったりしますと、こういう機会に日本人の、普通のと申しますか、普通日本で日本文学を研究している人の話も聞きたいという御希望があろうと推測いたします。討論その他において、相互の交流をはかるためにも、このような形がよいのではないかと思います。

今日の午後は研究発表会ですが、明日の午前中の研究発表会に続いて、午後の公開講演会、これは例年のことでございますが、公開の形で行います。毎年だいたいその頃に来ていただいている当館の客員教授のかたにお願いするのを、いわば恒例にしております。今年はドイツのハンブルグ大学のシュナイダー教授が、客員教授としておみえでございますので、プログラムにありますような題で御講演をいただくことにいたしました。それから、もうお一方については必ずしも原則を決めていないのですが、今回幸いにも、国際交流基金の援助を得まして、ロンドン大学のオニール教授にお話いただけることになりました。つい先日日本においでになりまして、二週間ちょっとくらい御滞在でございます。私どもでお願いして、そして交流基金のほうの援助を得て実現した次第です。そのお二人の公開講演会を、明日の午後に行います。

さきほども申しましたように、館内の者だけでなく、館外のかたも加えまして、委員会を作っております。昨年同様、青山学院大学の池田重教授が委員長で、アラン・ターニーさん、ドナルド・キーンさん、長谷川泉さん、芳賀徹さんを外部から委員にお願いいたしまして、研究発表の採択、どのようなプログラムにするかというようなことの御相談を経て、今日を迎えました。

こういう所に立ちましたついでに、毎年のことで、何度もおいでになっているかたは、またかとお思いかと存じますが、当館の近況について、そのすべてではございませんが、ほんの一つ二つだけ御紹介申し上げます。

御承知のマイクロ・フィルムの収集は毎年継続されておりまして、今もう85000点くらいにはなっている、それを超えているかもしれないと存じます。この数が増えますと、ただ増えたということだけではなく、相互の関連ということもあって、利用価値がだいぶ増してきているように思います。事実、閲覧や複写サービスの利用者も増えてきております。

それから、これは今まであまり申しませんでしたが、雑誌・紀要の類の、過去十五年間の集積が相当大きく、それ以前のバック・ナンバーももちろん

若干ございますが、合わせてやはり6万冊を超えております。これは御承知のように、「国文学年鑑」というかたちで毎年そのリストを出しておりますけれども、そのリストに入っているもののほとんどの実際のものがここにあるという状態になっており、これまた利用者が増大しております。

あと江戸時代以前の本そのものがございます。私どもでは、和古書という言い方をいたしておりますが、これはそうどんどん伸びるというわけにはいかないのですが、それでも現在約6000冊くらい在り、毎年可能な限り収集に努めております。その一端を、ただいま二階の展示室で「特別展示」として展覧しております。絵巻、絵本そして版本の挿絵というテーマで、50余点展示してございますので、休憩の時間などに御覧いただければ、幸いに存じます。

前回予告いたしました、オンライン検索というものを、今年から開始することができました。今のところそうたくさんの利用者があるわけではございませんが、徐々に増えていくのではないかと思います。これも御利用いただきたいと思います。今のところ検索の範囲は、マイクロ資料目録に掲載されているものと、さきほどの和古書の目録に入っているもの、それがオンラインで検索できるという段階でございます。これも徐々に範囲を広げていきたい、一番必要とされるのは論文、研究文献のオンライン検索でしょうが、これはキーワードを付けることにいろいろとむずかしい問題があり、もう一息というところでございます。当初は十分なかたちで、発足できないかもしれませんが、鋭意、数年後にはそれができるようにと考えております。

なお、ここの三階に参考室というのがございます。そこでは辞書とか索引とか、あるいはテキストの翻刻とか、われわれが手軽に使えるといいなというようなものが、開架で並んでおります。これの利用価値もかなり大きく、歴史関係やほんのわずかではございますが美術史関係のものといった、狭い意味での国文学関係のもの以外の参考資料が、かなり豊富にならんでおります。機会がありましたら、あるいは必要なことがありましたら、どうぞ御利

用いただきたいと思います。

今日および明日、皆様の研究発表とそれをめぐっての討論、また公開講演が、実り多いものになることを期待いたしまして、ご挨拶といたします。

発　行

昭和63年3月

編集兼発行者

国　文　学　研　究　資　料　館

〒142 東京都品川区豊町１―16―10

電話（03）785―7131（代）